

HP 花図鑑の試作：花の話題

2021/7/24 HP 編集者 TI

同窓会 HP において、彩を添えるために散歩途中で撮った季節の花写真をスライド形式で載せてきました。花音痴なこともあって花写真には花名を今も添えていません。しかし、ここに来て状況が変わり、花写真に花名と簡単な説明を添えた図鑑の試作&設置を始めたのです。状況を変えたのは、複合した次の3つの要因です。その一つは、貯まった花写真が2,500枚ほど（バラ、ダリア、アジサイが圧倒的に多いのですが）になり、このまま忘却されるには余りにももったいなく思ったこと。二つ目は、花名の特定に便利なツールが現れたこと。それは、スマホで目の前のものを撮影しただけでその撮影対象を検索してくれるサービス「[Google レンズ](#)」です。3つ目は、これで長年の花音痴から脱出できそうに思えたこと。4つ目は、新型コロナ禍の自粛生活下における自己啓発、いやボケ防止の実践になること。

ここでは、この花図鑑の試作を介して興味を持った花の話題を3つ紹介します。

花には沢山の名前がついています。例えば、学名（ラテン語の名前で全世界共通）、英名（英語圏からの外来種に付された名前）、和名（日本で普通に使われている植物名のこと、標準和名；一つと限らない）、総称名（サクラ、ユリなど特定の個体を指した名ではなく、一般的な総称）、園芸品種名などです。HP「花名と花写真」リストや図鑑ページの試作においては、これらを混在させています。

1. ヘクソカズラ（屁糞葛）



図1 ヘクソカズラ（屁糞葛）

ヘクソカズラ（屁糞葛）（図1 参照）は、日当たりのよい道端や河川敷、草やぶ、林縁などいたるところごく普通に生えるつる植物です。小さな筒状の形をしたとてもかわいらしい花をつけています。また、その花

の中心が赤く、目を引きます。一方、花や葉、実などをもんだり、つぶしたりすると悪臭を放つことから名前に「屁糞」が付いているのだとか。花や葉をもんだり、つぶしたりして試してみましたが、少し生臭い程度で「屁糞」をイメージするほどではありませんでした。個体差、個人差があるかもしれません。英名では、Skank vine（スカンクの蔓）、Stink vine（臭い蔓）になっています。それにしても気の毒な名前が付けられたものです。

「屁糞葛」は、田植えの頃に赤紫色の可愛らしい小花をつけるところから「早乙女花」、あるいは火のついた艾（もぐさ）のように見えるので「灸（やいと）花」とい

う別名もありますが、そのようによばれるのは稀のようです。

万葉集では、「屎躰(くそかづら)」の名前で詠みこまれた1首があります。宴席で物の名前を詠み込むお遊びで披露されたとのこと

「 蕘莢(ざうけふ)に 延(は)ひ おほとれる 屎躰(くそかづら)
絶ゆることなく 宮仕へせむ 」
高宮王(たかみやの おほきみ) / 巻16-3855

「延ひ おほとれる」は、長く絡みながら延びてゆくさま。
蕘莢(ざうけふ)は、「かわらふじ」ともよまれ、マメ科の「ジャケツイバラ」。幹や枝に棘(とげ)があり、花は鮮やかな黄色。
この歌は、蕘莢(ざうけふ)を朝廷、「屎躰」(クソカズラ)を自分に喩え、

「 カワラフジの木にいたずらに這いまつわるクソカズラ。
その蔓さながらに不肖私めは何時何時までも宮仕えしたいもの。 」と
現在でも見えそうなセリフで詠っています。

後に詠まれた俳句や短歌もあります。

名をへくそ かづらとぞいふ 花盛り (高浜虚子)
表札に へくそかづらの 来て咲ける (飴山 寛)
秋されば へくそかづらの 花にさへ
うすくれないゐの いろさしにけり (尾山 篤二郎)
くだらぬ 物思ひをば やめにせむ
何か匂ふは 屁臭葛か (若山牧水)

ことわざもあります。

「 ヘクソカズラも花盛り 」

— いやな匂いがある、あまり好かれない屁糞葛でも、愛おしい花をつける時期があるように、
不器量な娘でも年頃になればそれなりに魅力があるもの —

ちなみに、同じような意味のことわざとして、

「 鬼も十八番茶(ばんちや)も出花(でばな) 」があります。

— 醜い鬼も年頃になればそれなりに美しく見え、粗末な番茶も湯をついで出したばかりは味わいがよい、という意から) 醜い者も、年頃にはそれ相応に美しくなり、また、人の世の情けを解するようになるものだ、の意にいう。現在、女性についていうが、古くは、男女いずれにもいった。—

2. セイヨウオダマキ（西洋苧環）



(a)

バラなどとはかけ離れた容姿で、そのかけ離れ姿の美しい花があります（個人好みに依りますが）。セイヨウオダマキ（西洋苧環）（図4参照）です。人の名前のような「オダマキ」は、糸によった麻を中空にして巻付けた物、あるいはそのための器具（糸巻き）のことです。花名は、花の後ろに長く伸びている4本の部分がオダマキ（道具：図5参照）に似ていることに由来しています。何がゆえにこんなに美しい容姿を持つのでしょうか。



(b)

図4 セイヨウオダマキ（西洋苧環）



図5 オダマキ（苧環）

図4 (a)および(b)において、それぞれ黄色いおよび白い部分が花びらで、その後ろのそれぞれ赤っぽいおよび紫っぽい萼(がく)と呼ばれる分です。萼の後ろに長く管状に張り出しているのが、オダマキ（糸巻き）に見立てられた「距（きょ）」で、蜜が貯まります。受粉を確実にを行うために不特定多数の昆虫ではなく、“長い吸蜜機構”を持つ昆虫を引き寄せるための構造となっているのです。セイヨウオダマキは、厳しい自然界を生き抜くために送粉者（植物の花粉を運んで受粉させる動物）が選択できる巧妙な仕掛けをしていたのです。

3. シャガ（射干）

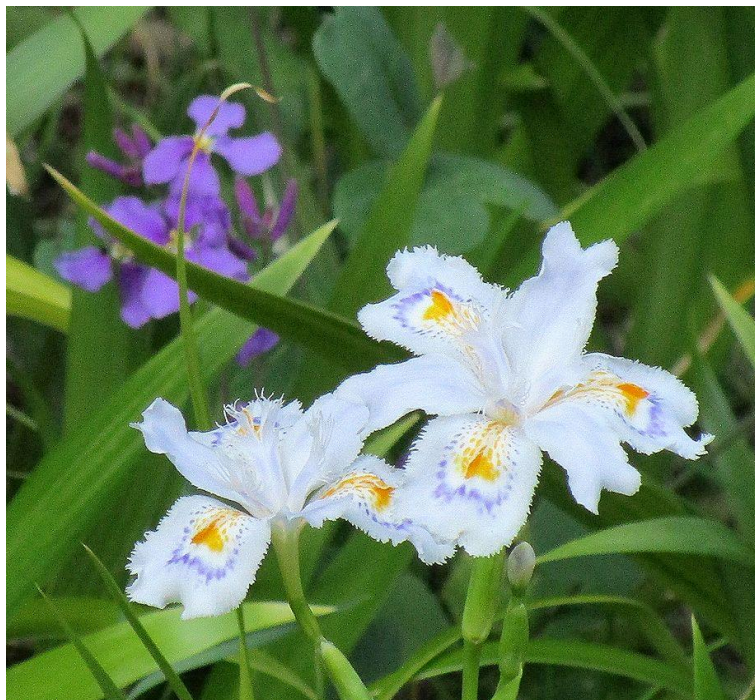


図6 シャガ（射干）

図6は、人家近くの森林周辺の木陰などの、やや湿ったところに群生しているシャガ（射干）です。シャガは、三倍体（注1）のため種子が発生しないというのです。このことから日本に存在する全てのシャガは同一の遺伝子を持ち、またその分布の広がりは人為的に行われたと考えることができるのだとか。

したがって、人為的影響の少ない自然林内にはあまり自生しないのです。山里奥地などでシャガが見られる場所は、かつては人間が住んでいた場所である可能性が高いのです。ハイキングなどで山歩きをしていますが、廃墟を含め人の生活感のあるような場所以外（つまり、自然環境下の場所）ではシャガを見かけなかったことに納得をしたのです。

中国には二倍体の個体があり花色、花径などに多様な変異があるといわれています。2倍体では種ができ、変異によりいくつかの優れた個体が選別されています。

注1 3倍体：細胞の染色体の基本数の3倍の染色体数をもつ倍数体をいう。主として植物に限られ、四倍体の植物と二倍体の植物を交雑することによって得られます。普通の細胞分裂には支障がありませんから3倍体の植物体は、正常に成長し花も咲きます。しかし、三倍体は奇数のゲノム構成であるため正常な減数分裂が起らず、不稔性（ふねんせい）である（つまり種子をつくれない）場合がほとんどです。

日本のシャガは、種をつくれないのにきれいな花を咲かせています。何のためだろう？ 無駄なことでは？ と疑問がでてきますが、ここまでにしておきましょう。

植物学者牧野富太郎の言葉に、「雑草という草はない。それぞれに名前がある。」があります。また、生物学者である昭和天皇が、1965年9月、那須で静養中に侍従らが皇居・吹上御所周辺の草を雑草として刈ったと聞き、「雑草ということはない」と発言。「どんな植物でも皆名前があって、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる。人間の一方的な考え方で、これを雑草と決め付けてしまうのはいけない。注意するように」と話したという。